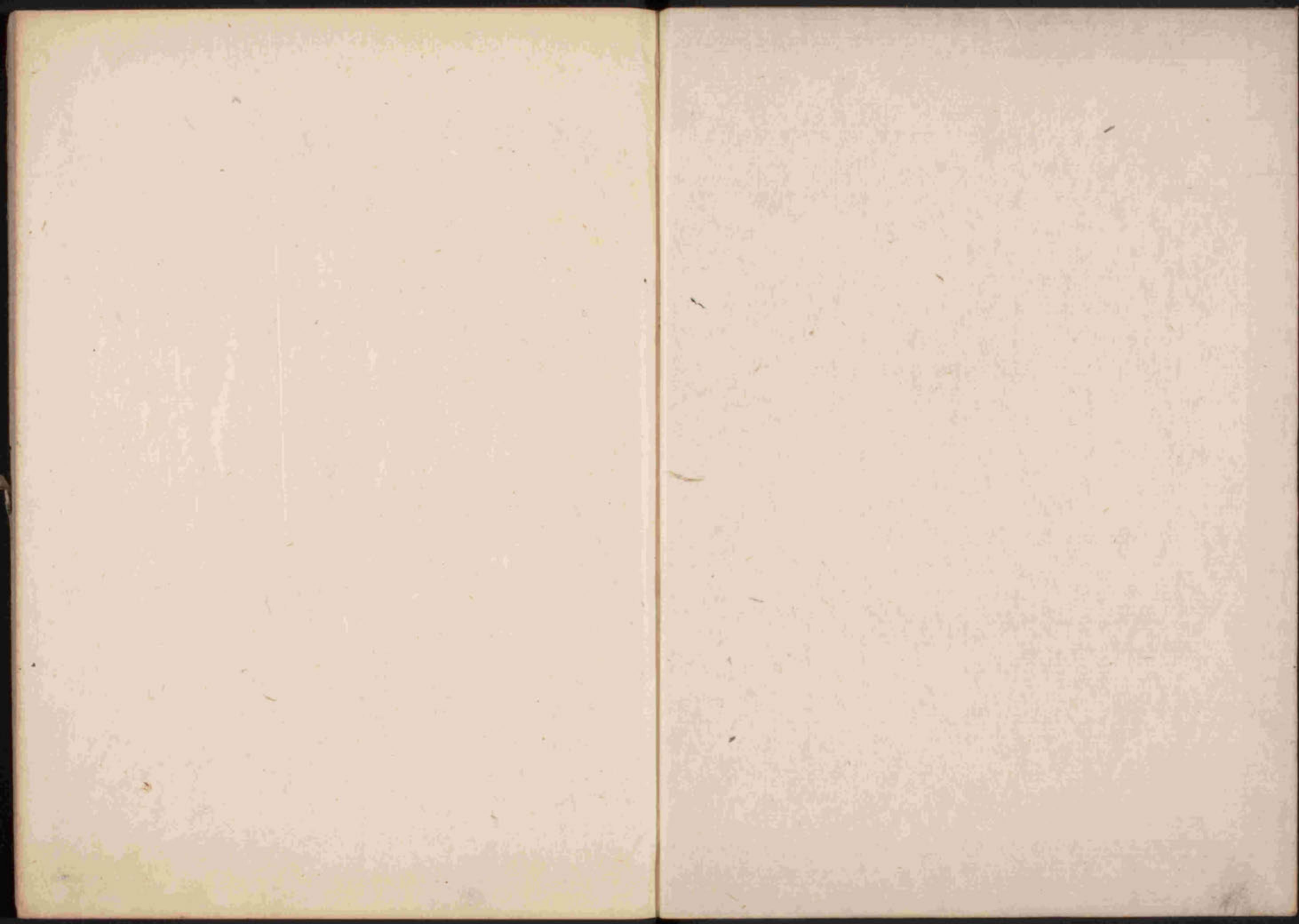


支本

廿九年
雍十二



本

文集百首 桃柳作高林種桃成老樹

惠鎮和尚

引く一毛が枝より下へけて毛とあわすもちよけの
六帖題4 指傳瓦云朝

六帖題記

指傳丘云幹

栗田右太に念佛たてされうよよめう多の事
法宣洞院

卷之三

三

卷之三

七重寶樹。凡六一寶相。理。相。

貫相理視

文永五年九月一首

日暮久留人未歸
秋光一望一相思

六帖題

卷之三

四

氏家

同

卷之三

正三位
家

新井
もとより此の山中
は未だましませぬ

卷之三

本ノミニモ
古ノ木

木ノミハス
立木

木ノミハス
立木

同

山木

同

立木

かきの木にて木のうねりをもる事あれば時を記

寶治テモ百翁

同

いじせんの木にて木のうねりをもる事あれば
嘉祐三年百翁寄木毫

白悔之武家木がよがよがよがよがよがよがよが
れ木

藤原教嗣朝

れどもさくさく木のうねりをもる事あれば時を記

三百草肩中

えは木

好思

九月立木

宋本ノミハスリナリナリナリナリナリナリナリ

家集毫

そら木

新十進ト

百翁哥旋乃寄

うら木

修理大ま頭李

吉刊

万

まつままでしむれにれにれ木のうねりをもる事あ
れ

修理大ま頭李

吉刊

題不乞

修理大ま頭李

吉刊

十五百翁寄木

うら木

修理大ま頭李

吉刊

延長八年百翁

うら木

修理大ま頭李

吉刊

もとまのれづれづれづれづれづれづれづれづれづ
建保元年百翁

修理大ま頭李

吉刊

六帖題

正三位家

かのうのまつたひよつまつてもくせんやうじせん

承久二年三月廿日
元守内言家

のまつ月とくとよせん

家集

えり木

西行上師

上人

せうとうくねまよのせうとうくねまよの

同

めかり木

重文

けすい東慶は師のめぐらわとつらと
あむみてあめくすくわをれにまきてと
百首のたほ初を 真蓮法師

つゆるうみてわ木の行ひにまもとすまち
の文應元年毎日一首中

民詠家

家

めくわをとせよがすくとあるじはのうちさまよ

同

ちうき木

和泉式詠

ちもひよすよやわらわらめくわのうそくのとく

同

めり木

順

おどる宮乃にそよわくわのうそくのとく

同

ひづき木

千葉

ひづきあまくわおまくわのうそくのとく

寶治二年百萬寄木庭

信實朝臣

うあわきの事すゆ
前山色をじく人連

松

題不効

人九

ひ山ねもよあせとそりやすりあらん
同

信人不効

わえのなめいれしよ下はまもりれ

人九

のちえんともしとちうのわくとえうる

結枝

有間皇子

ひあらね枝としあゆくもえりん
見結ね作う

吉丸

是代入野中にそくしといねふりけしもん
題不効

叶納言家彦

持

方

讀人不効

清

在

莫因

雪

御来

讀人不効

晴

在

莫因

雪

御来

是代入野中

鷺

卷

向

也

也

同

是代入野中

鷺

卷

向

也

也

百二十一 豊川ノ
御瀧社

篆刻上

姓相之 姓

忠実ノ

實之

ひもねよやうもひよつけみけとすりて

元服の下すよりて 能宣朝臣

春り時にして山野の松木すまけとすりて

日融院即時紫野の子日よねのじく

ひくえをうてらをとすしる木の陰生と

家集春哥中

信賴翁

とととしの氣ひたむいとれ木とさりて

三百字角丁

妙見

さむじきのわね枝とに清下く岩にたとめて

建保二年名所百首

後三位行純

年、うじめあをきねをひりあざすはひ見

洞院橋改家千首

円

あうせじねの木のまくらそくう月よ林ゆく

文永五年毎日一首中

民詠つる家

つるもしりこわとそ朝ひ下倉ひなゆせよみち

建長七年頃頃家千首

信實翁

ひづよそりしゆくすみるよみ称らむ先のばら

六帖題

同四

葉

葉とくをいへがまうてゆねの三月にしみるやつとも

家集

而ち

おのむかするにせこひそかす行ふれのま

承安三年七月十五日家主合庭

俊惠法師

あまきは三葉よりとね枝うどねのをせらもよほ
け寺判者清輔相公えれと三葉て葉セ
ひとといふとぞ

正治二年百角寺

式子内記

前序

水

山さとひまよせわの寺木葉はれとぞの水

百角寺

宣翁

書もすくわむよてをもとあそじての

朗詠江相公

金浦鶴天更寄

院林集人某

十五首寄合

あつ陽門院妙

刊元

いくてむねのほとさんやのひめの本とをす

正治二年百角

第三のみ

千代すまみやのひのこねとくのまくあそじての

同

あす内記定家

は

りえりうねのえりもつゆくまくはくわが

文治三年七月一首中

因起の家

は

まくわねすくまくわがとたわら葉がすく

正治二年七月一首中

内

たれさとちとたのもよしよまくわのまく

合三鉢

大師為造高跡山寺院印傳相承從源了上同釋光明集

元治元年七月明月洋故越祐慶

反誠為密教有縁之日明月也

光臺院入道二品般主家七十首寄松悅

正三位家衡元吉

ま、代^{アサ}た^{アサ}ひの見^ミれま^スも久^ク青^シや^マ寺

同

如^リ行^ハ去^ル

巫^{アマ}あ^マみ^ルと^ア見^ミれま^スね^ル御^ミし^マの^ス代^{アサ}し

正^ヒ治^ヒ二^ニ年^ノ百^百肩

前大納言忠良ヒロマツヨウ

ほ^モと^ア見^ミね^ルお^スと^アも^スけ^キや^マも^スを^ア行^ハく

家集^{シテ}舉^ハね

後三位家隆ヒロマツヨウ

内院^ノ校^ハ改^ハ家^ノ百^百肩^ノ雪

後九条内大臣

か^シう^シゆ^シや^シま^スね^ルと^アだ^リよ^ア直^シ原^ハ集^{シテ}舉^ハく

後九条内大臣

建保二年和^ヒ下^シ寺^ノ令^ス松^ノ經^ス年

後三位家隆ヒロマツヨウ

神^{カミ}代^{カミ}也^{カミ}く^シよ^アつ^シと^アと^ア神^{カミ}づ^{カミ}く^シう^シる^ス行^ハく

惠^エ鎮^{ジン}和^ヒ尚^ノ

き^シみ^シみ^シや^シせ^スよ^アま^スす^アま^スて^アえ^シう^シじ^トね^シま^ス

佛^ブ集^{シテ}中^ハ

同

友^{アシ}千^チの羊^{ヤマ}ひ^シて^アお^レよ^シけ^スと^アも^スし^シそ^アる^ス義^ギ和^ヒ尚^ノ

人^ヒも^スに^アい^シう^シり^スと^アが^スき^ス、^アま^スか^クわ^ルの^スも^スお^スま^ス

か^アう^トと^ア新^ハき^ス

通^ハ信^シ朝^ヒ臣^ノ

子^ノ日^ハ月^ハ金^ハ

達^ハ長^ハ年^ノ百^百肩^ノ寺^ノ公^ノ

表^ハ蓋^ハ肉^ハ火^ハ

新^ハカ^ス

おまかせうねたゞよしとひづるを仕もひつゝま
十五番守合付 大功吉無定 家宣

十九
書詩合序

大約去無定

かくの事にあひておれどくわばれをもせ
義和元年四月仲秋

卷之二

古元書

家集祝壽中

宋書卷之三

十五百番三合
宜秋門完用

五日未
よみやら

文獻卷之三

まかでいのね
風見

卷之三

卷中用五

御内侍の御内侍

題不幻

吉田の事

家集

不善の如きは本を以て

並
列
傳

中野の松の下

朱子語類卷之三

日暮に於ては、

同

后

たもしもまよめのいわもじよまよめらに
貞應二年六月名所百首

同

きよしよああああああああとおおおおおおのなみ

同年辛未百首

同

喜代野よもよもよもよもよもよもよもよもよも

嘉元元年百首松

參詠為相

乾元三年二月麻原長清家工^ハね

同

さくやけてたまにゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

同僧墓法印

霧庵主

金霞鶴臘花唐
かくさくあくとう

まとこりてひそんづれとねむよまくまとえあ
はるかに伊勢國ふく三りひづり

題不動

君代よめよめよめよめよめよめよめよめよめ

侍兵印

大京寺ま頭輔

毛代よめよめよめよめよめよめよめよめよめ

喜多院入道二品親王家五十首

隆信朝臣

たすすきわどをきくもよじゆのひれのよせと

墨屋入道橋改家百首同ね

氏詠卿為家

ひそかひくとももあたすけよふとまよとすほ
君臣中玉合おとこ 岸中納言為事

東北とうせい 美也みや おれ山ねのすよとひづねすよ
もえ三年仙洞子公

月

とせやさしあねをとすてもすまもとくら
雜哥中ぞく 他阿上人ほかじょうじん
さうりあねよのまつれとてとめらせよあ
建保三年家百首山中右所

刊

光明年寺入道橋改

すまやくよしと持も 三つ人みよ せじ屋のね

同年右所百首

僧正行意

讀人不知

えく風野ふうや のね原はら えくきて 持も 三つ人みよ せじ屋のね

千九百首同

皇大后室李鑑成

きて やく風野ふうや のね原はら えくきて 持も 三つ人みよ せじ屋のね

文治五年杜百首

同

竹とくよそよおれとみて 清とすきり山あれね

圓院橋改家百首様

後序

しわせのねは月夜とてまよひの原の草

雜詩中

後賴朝白

とあらゆやまみにそぞろをきねむるは

名所坂磨浦

法眼慶融

わのせんやほしきもまつをもきよすじとく

百首詩中

順徳院御割

とめゆるよの戸もまく全くすづくもとて

建保三年名所百首

は鴻原

原古

時そよよと君室に重くありあらわる

百首詩中

慈鎮和尚

とくすよとての風す舟とてまきうる

内

舊三季百首

長佐家屋

房

とくすよとての風す舟とてまきうる

百首詩中

慈鎮和尚

とくすよとての風す舟とてまきうる

文昭法師

とくすよとての風す舟とてまきうる

文昭法師

とくすよとての風す舟とてまきうる

文昭法師

とくすよとての風す舟とてまきうる

後賴朝白

とくすよとての風す舟とてまきうる

後賴朝白

とくすよとての風す舟とてまきうる

後賴朝白

とくすよとての風す舟とてまきうる

後賴朝白

とくすよとての風す舟とてまきうる

後賴朝白

とくすよとての風す舟とてまきうる

元久元年詩中合水春望

慈鎮和尚

志賀乃角の原よりあじゆがりすすまもんとまの
新

六帖題

信實

佐助

乃てせ木またいにあいねをまくと誰

前草納言宣家

ありえんをとせにやもせてつまうらちまわせれ

け手ひどきとのよあくとくたきやくさん若ね

くそじよてねよまうて外は清範朝

内もく地形勝絶のうりやくろんわくよ

めぬき

玉難

同

而り上人

ねとくとくかすれとれヌキえもあきとめやゆ
ひきい夜越野(まやうのういととをすみ)

玉難

同

後二位行家

よみく吏(官)住(居)と(居)う(う)き
建長八年百萬三公(官)衣(衣)肉(肉)大(大)

あ(あ)だらのな(な)る(る)も(も)す(す)い(い)

同

後二位行家

たと(と)ぬ(ぬ)く(く)に(に)ね(ね)の(の)す(す)た(た)き(き)と(と)

り(り)す(す)え(え)う(う)じ(じ)わ(わ)に(に)れ(れ)も(も)う(う)の(の)そ(そ)と(と)

家集

豪盛

ニ(ニ)ま(ま)し(し)ま(ま)れ(れ)の(の)に(に)ま(ま)き(き)と(と)く(く)

文永五年毎日一首

氏部(式部)為家

あ(あ)ま(ま)ら(ら)ち(ち)と(と)下(下)もの(もの)さ(さ)の(の)ね(ね)原(原)時(時)

文應元年夏月

四

わくよむねくもひうみゆきさくなかどし行をり
支臺院入道ニ承松丁立首紅雪
前序納言支經

丁巳首夏
前序言之

おのれの心に高きものうそとわれのも立
千首^千
民謡の家

民歌二首

四

予（アキラ）トモニテ此の書物をも

卷之三

讀人不先

力衣表す。かくの事は、まことに、かくの事は、まことに、かくの事は、まことに、
韓眼捕乃。清介玉半蔵付隼姫人缺得。

今玉 半付半 姉人 欲得

元久元年北野官署合志文

後二位家譜

吉川公綱に於て忠山と申す者あり乃又同
寶治十首詩合譜 大藏卿有家之
印をもとよりのれのえりてよしわせ

孫仲葉

月寄中

詩集立秋

卷之三

松葉草本方

卷之三

前中內定家

松風月夜の如きは、秋の序の物語也。

御内閣の御上のねのうきあてあまたうぢと流る
家経て天主後君不障す

家號曰天王院君不滿障子

如頤法師

千鳥もすすめむよそくねのひととし神子
高嶺山秋 蘭原守

高麗山秋

蘇東坡守

鳥羽院のよひきの内は、
おもてのよひきの内は、

前中所言空家

冬の日もあつてはあきていたるにこひのま
然野十二首之 大藏卿 隆輔博士
翁のじきのわきよまことせむねるゆくゆき
家集 蘇原長祐

藤原長祐

卷之三

たけく風よづきだよりくまの力あひゆゑふねどく
くにあのかあすとまか一せのねうじくらよ

題不幻

讀人不倦

どうぞのたまねく。おまえをとめらへよ
家集

妙

乙卯年夏月

小詩後

千五百番歌合
麻蓮は仰
ハシマリ

一五四

四

二陳詩讀法

き度はおもしろうるみをのれまほえ
延保三年右所百首

往三位行能

こやどあさま風川をとてひむすねれ
うれしきうそくのきとこのよめりてまて

意感

白浪大せとけき海のひよねもとさのけとやきて終
六日向國まひとひまねのうよ原よす

重之

そ波のひよねと根とけてゆきぬるいまの
石ようみねのそひうと

惠慶法師

猿
うらはましやうねのもとすれまほ
六月人海松院院よとくみすましろ

月

もやの川音の音ひくねの月やせれんかく
あ集

月

もやの川音の音ひくねの月やせれんかく
あ集

葉草朝臣

うらはましやうねの月やせれんかく
千上人書

正三佐秀祐

うらはましやうねの月やせれんかく
そのよあゆみ

枯擧

かともか年はもわう我りとあひのね年ひあ
今

月

すよげうのひをまわしもといねくらんのうす
け可家集云中勢惠もとをまのまに流
送てほして自じとこけのくにとりてね
きもとどこまてんたどん下よきすりけ
とよさう

日午千鳥

後全右衛門

なまやぬりねくらんのうすよきすりけ
ね同雪

同

保元二年毎日一首中

氏部守為家

伊勢の海あれねるまよとてもひゆねよまを絶
九条大納言家三公会新和正
萬葉傳と呼先

家長翁

ともとふるをきてとせ父子いじともあれねくら
伊勢まくらゆくよしのねとみて

古事記天皇室萬葉

ひまくら人主これとてらみれねもしれ物くら
宣方見て向^て屏風向^てね原よた^て根^てねの下よ處^てりせよ
おまよとよきだ^てあ

太宰大貳高遠

わははとよのね源^てうとくにこくをとす内^てと

うらはせまう行かむひそめれ
四
うらはせまう行かむひそめれ
四

建保三年正月一日

正三位忠宣

家勝天王院君門譚子
公卿を歎すのみ
作者脱り書の忠言
と一通も一忠言も人手に傳ひ
同上

重慶名所を詠す。右の事は、
すのう。家勝室天王院若江序。樟子

秀平山の國風に於て
其の事は

さへはましに思ひ立つてやうにすむ。筆者に明かす
きがふらはうすてし山崎國鳥山の筆也。

新續古文苑後編卷一百一十五
丁未年正月五日
日生之公書
有聲無氣
入玄冥而永助
音律之妙也
陰也

たまご元尾上ノ月よ秋子くねすらく廊を晴れう
立昌勝の方王院(高麗に立てばおもかく)、
萬葉幼王完家也

春

百首五言

右第三行

卷之三

清集

白
詩
卷

法性寺道開

卷之三

後京極橋改

モリヤシニシヨウヒツノ様也アラキ
千五百石守令 宮内院丹波

千五百奇人

宣和元年

天喜二年夏房家三の会祝
やまとせふりてん

讀人之言

毛の年付をかくと年付がひびきやうとせ様もあら
永久三年九月太神官称宣下の合訖

同

まくらをまわさりむの主はかねもすてぢよる
寛治五年十一月後三位右京親王家

卷之三

もとよりは生れも桂りよの本にあらう

宋久三年十二月太冲官杓日合

卷一百一十五

前田紅言室家

六帖題

卷之二

題不乞

むすび様さげきや

五
月
廿
四
日
晴

こせとくは 桂は より
川上へて 桂つゝよきとあひさせのまゆと

賀茂守合露と 殿富門院大輔

はア官(古)

衆あらこそその差所の内桂つ御あれども三す

久安百肩

夢(元)

待賢門院安藝

は富(古)

玉桂いりとみく玉木代はきうりさくうともし

家集寄桂意

源仲氏

花よそくやよ桂をすりとてたえのじよを

柏

家集六帖題

永葉内侍

藝(元)

人をとめかの本

信實(元)

その内がのともひよそてのをとせや

同

光後院

日 ちやうだんしおどせをそなえいもたれ
建長七年殿朝卿家平首守

同

ほようことをゆきまわるに憲よ里(古)

六帖題

柏

信實(元)

ほのうよねとかへともいきまくはそもぢるよが

立有番守合寄本之

前中納言宣家(元)

志もとはけしとてよがうすとせ共(元)空(元)

け奇判者云た若もとほよ柏(元)てとい

つらゆようゆくいそい史記と文字音

文公の妹の妻よつとて
和古和古
年もてよつともとて時時とせよとやけま
妻妻ひいて大九年のひりじより月の上月
柏柏かくすうもどりがうまとこそ乃宿宿
あま車車と思思ふまやとま

桂

桺桺女女新新作作百首百首
後九章後九章内内木木
山山毛毛日日ももききれれ新新也也かかせせたたののるるまま
前前中中納納言言宦宦家家てて家家にに守守桂桂也也
家長家長胡胡也也

信實信實胡胡也也

六帖題

四下

内

あひあひかくらかくらににまきまきのの木木ののわわちちかかれれ陽陽

三

森林森林和和奇奇

鴨鴨長長明明

寶治二年一百首一百首行行歌歌

信實信實胡胡也也

ひしの波波せせらせせらややさくさくんんちちももり

六帖題

衣衣笠笠内内木木

ひしの波波せせらせせらややさくさくんんちちももり

正保二年百首百首桂桂

信實信實胡胡也也

夙夜心不寧
新羅秋子合述懷

新羅秋景合述懷

卷之三

六帖起之
精博之云期

壬午年夏月
桂子山人仲實題

朱賴胡氏

人を殺すよと風やかに笑ひゆ
金を取る事あらず

一章
后宮門

卷之三

卷之三

秋
月
夜
雨
次
元
白
居
易

詠花
避來之陰讀人不初嘆往見者

支那の國事に於ける外國人
の立場とその問題

題不
清
河東全知一

同之，乃深法其久，讀人不知，數精。

宿まちやくすむらやくはなまくまくわもまく
六首書寺令寄木庵

正三位經家也

まよひのうじゆめまほのわがくにまよひのめぐら
吉元
方公
萬葉入道ニ正和家六十首二合

禪性法師

朱のまにやえいきよひすきあとのうへにまくら
千五百番守合 徒一位家隆

千五百首詩合

後三位家隆

六帖題

新笠内大司

日朝も唐もうつれりや

卷之三

民部志稿

建仁元年新官櫻
合露隔遠樹

後京極橋改

千首詩

田部之考家

正治二年夏月

宜秋院丹後

孫集惠子

錦倉右大臣

家集卷二

後二位中也

原より
三月

校保持

十題百首木

波打つまへる

床庫住所

卷之三

慎

長承三年賜輔之家之合而承

維復朝臣

題不乞

卷之三

長
卷

卷之三

卷之三

題志

四

六帖題

民詩

不思議の
家集

後二店家落成

卷之三

卷之三

卷之三

東漢雜經

千五百萬年

後宮舊物

同

うふ村の東あしの山里すまむらのへじあきよ

寺建長三年八月一首

氏説アホ家

元

まちあれとそてはまじのまほたつる名前
百角門寄守若也惠

光明寺守入道橋改

名林アサヒのじゆもみつとこあさ、まくノ原

家集秋山麻

元

後二位家

元

ほくとくとまくひもすとまくひもすとまくひもす

百角哥

安あん院雲

通波じもけこくすもすすすすすすすすすす

元年竹園

元

千角門會守楨惠

元

參議乃相

り、神をやまと、ごんもくとよもと、山をけさ
延保三年名所百角

正三位知家

元

六帖題楨

新

信實おとて、信實おとて、信實おとて、信實おとて、

波引く行け、財富の海けく日

前傳正道慶

元

れどもわらわ枝をうどきそりをもひだま

瓦代雅

松

題不知

讀人不知

辣南皮もしきのじくすまきひとき人や若葉

百萬寺合

後高松橋政

松づきとほのもとすみよそいとくまえのを
は九条内大臣家拿院樹裏

後一位家隆

年もあらそむて日り万わくの松のうきれえ
韻百下八首

弟中幼言宣家

在

文永八年毎月一首也

氏邦之家

かくまつての庭にまきけ松のまよととと
櫻武

業家

かくくひの松ももうも鳥もすねむすめま
題不知

讀人不知

かくくひの松ももうも鳥もすねむすめま

光修院

かくことひもとまくすまうりともくま

文集百首不覺樟房五極到

但純心靜昂身涼

家中幼言宣家

かくともまけの竹もと角がくまくま

前二事

後九年丙午春

たまひうてゐるよすをもとめかすててもせね松井津

喜のりに

は裏地横改

年と喜のとれと高いの見のれも又遠

嘉慶二年正月社寺会連

吉

床越法師

さうにもひよろもくの今うな松井津

堀院御時百翁

中納言固信

邊坡用の村と筆とをすたすよまく

永久年百翁稻荷詣

神祇伯顯仲

正三位季經

年と生すれと幸きてわまく今うな松井津

同

仲實相

十題百翁神祇

後京松井

年と喜すれ松井同すて御みへんとすの喜

正治二年百翁

正三位季經

年といひ叶ひ時のみ松井ともよひ是すれ

太神宮改六番弓合

而上人

うひよしらるる年松井風もよしとすよまく

百翁二祝立首中

藤原為頭

年といひ松のそよと唐崎のねのそよとよどき

後法性寺丈通用百家百翁

蘇原風方略

みねまとちこひなすにともりんくよ、（うちじき）おれ井

家集意三の節
元真

三條ノ山ノ核元老ノ事也。其ノ事也。

星不名

おおきなうきよのよし
おおきなうきよのよし
おおきなうきよのよし
おおきなうきよのよし

卷之三

補

卷之三

家集修道年傳行意
望山是神之子若也丁不見也
千五百畠不公後京莊構改

懷民行意
不以爲已

卷之三

卷之三

卷之三

10

もむかはりのときをもとよりあれども

十一

建保軍百首
後一位家隆

卷之三

董家口家五首五言合

卷之三

卷之三

子林うと田舎の風氣をもつてゐるが、その點で

十題百首木

前半幼言定家

まじめにあつておもひをけこむきてしらすを辛うそぞれ

百萬寺守

松鳥羽院清喜

卷向之捨原

すりて宿もよしももわらぬ

十

乞一とす

中山主家持へ

万十才

新谷本向

精雲居者入外司

おは小松寺

あさる

詠丸

秋葉

人丸

吉川

主

の翁へよきさんをりとやすすひとよがくすりえん

洞院橘政家百首五日目

前中納言定家へ

三翁不^レス月乃^レ不^レ月^レ相^レすまひくわらすをそを

奈良花林院寺合雪

讀人不知

かうか三翁ひくに君すみま木ひくをせひくを

麻蓮法師

百萬寺

もじれひとくに刀ひせひとくをあひとく

御集秋雨

中精てのとこ

宣のりえむのほくもあひてしもあひて秋也内

文永七年毎月一首中

氏部守家

時事あがく不^レ兼久^レよ^レの風ちりとことせし

千首中

同

あまうよひまきひよもくよひく雪のたまむ

梨

六帖毛

正三位守家

時事あらわすもとまづかず守りむるの山の枝をひく

同

衣笠内大臣

年ゆきいとまづかず守りむるの山の枝をひく

新三

同

信貞公

が枝をひくすまづかず守りむるの山の枝をひく

弘長元年毎日一首中

山すばらうともかきとおとこてそくす

建長七年頃朝の家年首守梨惠

信貞公

まほらうとせのやうあるをあやまつ

六帖題山

同信貞公

民部の家

新

民部の家

新

さひてえよもりてうなみせのれをまこと
同

さひてえよもりてうなみせのれをまこと

日

佛集

後九条内大臣

まほらうとせのやうあるをあやまつ

出歸是木今萬山梨花

新

讀人不知

事とうとひてめうくすうゆどひまくゆま

ひくとひたとて

結因法師

李

古帖題

きそせ事と乃所までひづれめもとをかくす

同

山乃きよわしてはりうとをやまとをいもと花

同

信實正三位印

松うわきよ落ちしの身もひよくまつ

同

指傳正三位印

たまよよどきをみかまつまけよ

同

衣笠正三位印

杏

古帖題

い行てよひよりん正三位印

民部正三位印

同

玉あせおきのとほもととの色もあがめ

同

衣笠正三位印

柏

古帖題

いふあわせかくと内第と思とあせ府口也

讀人不知

同

五十六

寺の事の手かわをねりておもかくもゆらけ
手

天慶二年二月貫之家と合併名全

内

もものほつすあらむちくとあめがえもみき
天祐三年二月資子内親王家と合

内

もうめしろくまがひよこてすま
津集秋工中 後徳大寺た大臣

ちとよのてうのとくちり

和泉式部

とおもゆくにかどりてうそをめく

家集

建保二年家百有四

光明寺入通横政

君

神とあてとれかレ印はる事は

秋工中

ありト人

うきあたまのひとまのうのまにすり
家集ひまもありけうちもくわら

けも

清浦朝

ゆきとこじてうのわとくじまくわじとせ

雅哥中

正彦知家

刀をもとよだてかのとくじめりま

建保元年四月清浦舍遠村

後一位家隆

うすと遠山の村へいた。宿泊するもよしとし

家集百首の年は古後類

木まつて山の月と月をすすめよ舟や船

六帖題

衣笠内大臣

よひのこゆかとのゆき、鏡に映るゆきは

同

月の年はあらわかどもさよをかとく

さより

讀人不知

人をあわかと古事記のよもじをくみ

光臺院入道京根主

常盤井入道太政大臣

角の年はとおゆかは清やときのゆよとけ

建保年百首 家長経

そよよよよに山月あさうすらもきのゆれ

三十首三の年は同

うらぐるみのゆれもくらむじゆすらもくら

文應元年七社百首

民部為家

かくわらすはまごくのゆ月あきよまく

えい福元年百首の年は古

神祇寺中人家 度會仲房

しきいきみ乃がのさゆまとまく井手よまく

月

後類

神風やうねりにいひもあらかくすれ
は工の後史の家十首三つあるとと
るよとよめども

家集

民部の家

ち西

伊勢守やうねりそれもとてつじよせは神ま
實治三年百首寄本惠

長筆内下

神風やうねりそれもとてつじよせは神ま
承久三年百首寄本惠

長筆内下

神風やうねりそれもとてつじよせは神ま
内院守百首 家長朝

神風やうねりの勢又よようち今御幸をす

鴨長明

この風をうねりの勢又よようち今御幸をす
はす伊豫記この風よようちのへとひすが
わす小野守年よよねに在るのへとひすが
わすの前ひよくからむぬうとよめり星

じよくうすすめあらじ年じよくまくまよ
事とけいじんよよねをひえきよよねよ
」とのよよくまよよけいへ輔親卿

事じよくまくまの事よよくまくまよよ
うよよくまくまの事よよくまくまの事
せよよくまくまのうらじよよくまくまの事

木の上にうらやまにてやむうそりてきみす
すめひにうてやうとどんとたてこねに
せううやうとつとよもやうよとよすのあり
こやうひをうづき御主を友のゆきの时
ううとおきは前の人あもしとてのゆう
のゆかはくれとよおきみとあくやう
くきこのゆのうをなのひともしてよ
きえとのよひのうをなだめとひきと
しまでううやまくーとよとよのうまの
ゆ百萬のゆうとよとよのうまの
きくーとよとよのうとよとよのうまの
うにかとよとよのうとよとよのうまの

今もさうしておまけにかくすとてまわる
てそんまた三尺もくほどの木葉
たにいはとえ

摘

大藏卿有家

一
字抄
水
承久元年八月太政大臣家三の合戻と

月
ゆけふ等

正治二年百首四

第三のみこ推

あがむを承りに衰や風の如き本位をうなづひし

洞院橋改家百首萬春

後九条内大臣

名氣之有才子也。宋の事はもててころ差の

百首詩可晚風如秋

後徳寺大師

生けてるをよしにゆ風はあとおもく笑ひらむ

六帖題

在りは

信實朝

すき

ひどいにせかた手足の毛りえつけもとしき

椎

六帖題

旅人不乞

ハ古

わざとまへをあとそゆめし、むちのとみのこやて、おも(いたつ)の安(は)タ家(門)

六帖題

法橋頭

ス

六帖題

衣笠内大臣

ひづちのあひのこやてのよにゆきの人々はあひはりとも

音書す

法橋頭

ひづちのあひのこやてのよにゆきの人々はあひはりとも

延保三年末行百首

從三位家隆

久代までを承るぬまとだいのじさとひの内(内)事

山雪を

ほきの事も又精極(内)事

六帖題

ま後野(内)

竹風(内)の椎(内)も(内)いをよしもくとぞ

百首序合

長鎮和尚

とひきもだれにもうけまつるの筆の推舉
家集立の爲めあり上人

家集のうち中
あり上人

おもむきあるのではなかつてはまつた

家事多事

指下納言情足

卷之二

家長編

弘長元年百病不逢之

著者直隸
筆者直隸
ヨリ本邦来
三九
後半今人
又本歌而
時勢の外生をもとより之の歌の本歌を推
集

永之元年百有柏榮

神祇伯顯仲

將官の仕事は、日が暮れると、その年の年うきをもつて
止む。同

同

六百卷之合

附錄

后

ののを家がね歎故けりにへる
とてはさう思ひ宿の網

卷之三

けの事もあらずといひてあらう
ゆうとく

栗

而り上人高野トリニテ約三うね等す中

麻生は所

山子屋町也とととをもじりぬもよそに此里

「康和二年宵因信^{ヒイ}家之公石年志^{シテハ}(古)

源家識

おこてなぐにやと栗家^{アシカ}のうててもをうか

百角仰^{エダケ}すオ^{ミタケ}

本門院^{ボンモンイ}御製

うりえの栗^{アシカ}にまくらぐてちかくせんと

建長八年百角寺公信實相^ト

松葉栗^{アシカ}のをづくわいわよじうとそもとじゆ

圓院松政家百角寺の山家^{サンカ}

あ長船^ト

風^{アシカ}もくわき栗^{アシカ}ひろひをじてそひく人^{アシカ}もと

百角^{アシカ}

麻原為頭^{アシカ}

貞應二年百角^{アシカ}

民教^{アシカ}家^{アシカ}

世^{アシカ}や^{アシカ}林^{アシカ}よ^{アシカ}山^{アシカ}あ栗^{アシカ}もくら^{アシカ}く^{アシカ}や^{アシカ}木^{アシカ}もくら^{アシカ}く^{アシカ}

栗

同^{アシカ}の^{アシカ}も^{アシカ}と^{アシカ}神^{アシカ}の^{アシカ}上^{アシカ}に^{アシカ}か^{アシカ}る^{アシカ}栗^{アシカ}の^{アシカ}風^{アシカ}

櫻

十題百首本

前半句言宣家

久々はりこきう宿すねすらしき墨の匂ひ

家集之

修理大ま頭事也

寫ちゆふに下すすよ店のまへる事はりまくら

身の事と

後頼約也

まづあもうせしゆえ底きわえすむらまくら

粉

六帖題もろ

衣笠内大臣

さかのくの御年少むじんの本がくわ多をもぞりつ

内

正三位の家也

もとまきとおはまよりまきそよえううへとたてくもわ

同

支後約也

いざく我のうじのあれす人トドキれよたる

前中納後後家也

内

浦の吹きすずめもうじにまみひの風をもすき

六帖題空うしもま

守務のそ

ひくと極くのうそよ

原仲葉

題不知

葉

ひもれの風のうちもくに葉舟のうじほの風の風の風

同

讀人不知

ひもれの風のうちもくに葉舟のうじほの風の風の風の風

同

内

同人

おのとよはくもとほんじんとつからう
之

今古
詩題之序

はとやかまつりとひえまきあはり
正月御神事

信實圖經

同上
支後行
丁巳

永久年百萬是也

後編

松山城主の御子もさうなりもおおきよやうにあ
家集め今はとあるをせうよかどり

الله رب العالمين

檻

五

卷之三

同

卷之三

卷之三

四

支修齡

あつ火に先手をもとめまきりしてさけよとあす神
家集山家のと 佐二位忠隆也
わきえもとすりまきわたくしのまみれの寶よよぎつ
建長八年百爵三公 右邊中將經家也
せきやくふくじきとくわがそんまうく山内水
はく判者先後朝大云尋檀流之跡既得花
廣之文辭因縁共不詳旨趣又可深ことよ
寶治三年百爵山家水
城
寶治三年百爵山家水
佐二位賴氏也
かきともりあつともとせりもとらうく山内水

後二位毅氏

寶治二年
有肩山家水

震之文辭固緣其才藻旨趣又可深究此古

卷之三

一想

卷之六

正三位之家

卷之六

卷之三

卷之三

同

山のつま木にさくらの木に木とけつりたりそり
題不切
讀人不乞

卷之三

同

四

卷之三

四

卷之三

津同

或人毒摩

卷之六

同上。此亦
民數為家也

卷之三

おまえのほんれ種をそそぎあらはす

舊約全書

方へ是
ゆきすみかづか
はる川

古文題

内

信寶城

光緒朝

生まうむかとおもひ合ひあつた

胡桃

六帖題

卷之六

まことにそぞろにあつて
同
民家にてお家へ
時々はよき事なるをのうとおもひ

同

經

はるかに下りてひきあがむを乞う侍等

聖懷太子

はり
31

六帖題
雨聲之有家也

中野

白雲山房

宋李白集

利七
六帖題之が
正三佐家ん、
聖二
家

四

賀新郎

大示良花林院寺人祝

讀人不知

是日山中行幸
御宿所

長哥

まなこをす

たまことてうほるのうか うめれひにまよに
あまゆ えのところ

呉秀古

亡帖題

長生内大臣

きよたとも田上ひのうの木室山の野原を走る

櫟

貞應二年百首木

佐登(左)

民教て為家

ひ舟のそとけむらぬたよせやわくしもとと

猿滑

同

きくのゆきはくまくとくじてもよかとがよ

糖

同

きくのゆきはくまくとくじてわせまよ

櫟

櫟イ

同

きくらきくらひくとくじてわせまよ

冻

同

きくらきくらひくとくじてわせまよ

毛ち牛ノ木

毛元

内
志をもじてとれのむしの木をなすにいた
内
匠

内
青のめぐらみの木はあやうやうま
内
二神

内
同

内
ひいら木
内
世平、故の木ひづきの木よしもとを
内
そぞれ木

内
内

内
ありとも人よせたもの木アタシモトヒ
内
称と

内
かくすとよする種ともれひとすだのじき
内
あもく

内
秋の木の事ニシテヨドの木をあきこほ
内
ありまが
内
ありまが

内
同

内
冬の木の事アリスミテヨドの木をあきこほ
内
和木

内
同

おどりももじあわとゆすすめあらすま
さうの木

同

おもむかにまつりにあくまきまくら
せん

同

おもむかにまつりにあくまきまくら
せん

同

川をれゑのえの木をまきみのりのとね

柿

同

月

秋風はと木をのひまくらすくまもと經

家集

信實翁

百首詩

麻蓮は仰

山里の風のあ葉にとらふもとすやすらし
柿のいのりて葉のまちづきをみて

源仲正

古事記の風の歌をうそとめにせうる歌

素

寄木

讀人不知

たらじとよのとよのとよのとよのとよのと
よのとよのとよのとよのとよのとよのと

延喜十二年賀清屏月

元(左)

貫之

あくまちのにゆくまの、本もよどけともひ
たまむかとまで、その本よ頃のとくろと

後續鈔

露よまきりくいの枝をひびきほじり、ハセ我識

六帖題

衣笠内侍

正三位

引

内

引

わきもこくらえひのとあひまきもつて、
支後れ。同

引

前半約言を差へ

ナイ

吉田のめくらうさうまつむちきの枝をひびき

同

おせみやもとの枝をひびき、もじひめの
遠仰

題不

讀人不知

高木

わいたまきのらしきの、ト音よひましむ

光明寺も大角院政

根葉

六帖題

新

わいたまきのやかまくらうさうまつむちの枝

實朝

根葉

讀人石

やうもよ枝のさういは玉子の夫とその妻の夫と女
承安三年五月十六日あすか

嘉慶三年七月廿九日
節風
錢惠之印

是のアラミサニ風立てからひのうえ

西元年イ
色ハナツアリトヨ

心古方は人をいはんとし人をもむれん
東洋平子中同

卷之三

袁堂收本

著者　久松義重
建長八年百首玉之合
考文は
元亨

一
五

正三枝孝經

冬日、じきまのまほとれをせぐるよの風をなまく
龍之子は
之子也

弘長九年正月
修三便ノ事

家集曉時雨

建仁元年九月辛酉三月

宋納言惠良人

は下木とひきの毛にぬらすひて手を拂ふ事

衣冠もすとと あく上人

宿行すとまの毛の毛を拂ふ事もしき村田

永承元年正月一首中

氏詠て爲家也

とくじまうれの日よそくもほわけようる

弘長元年正月一首中

同

あいと見るをひらんととじうすむるの
述懐百首

宣太庵主大文後也

せとすすむるはるはるにらうるれとくとくかき
をとくじまうるにがくきて神すまきあひる

同

佐藤松氏

ゆ里に風とまくわのとゆかひとひかひと

寄生

卷之三

大序

支本和詩抄卷第十六

雜述十二

題

國

禁中

仙家

都

故鄉

鄉

故宮

園居

窟

宅

廬

屋

屋形

隣

山家

田家

國

左兵衛三十首三合

後漢書校讎

玉印風
氣もあまてくゆめどもすきとくもすき
弘長元年百首題

山

家

後漢書

史記

家

後漢書

水經注

家

國

同イ

支後御所

けいいもねいもくの國をとぢまやくはまそばひあ
題不云

様人不知

五味
ことえたりまちをもあつておきにとせ
大嘗會後経方御屏風

前中納言主房

お原もみの國とすよとよあらねりとま

肺集

同イ

國院持改

かくそせじとうすきは再びて契一主交

同

トアニ直

月
う日はまみの國とやまとゆきとを繋て
建仁元年たひり千首御う合

急鎮和尚

人のとも厚まとひまほ國をさへすとぞう跡

同

み一毛

後高持持改

しりとりくにづつはの水をとどめく字うち

百萬手令春曙

權僧正工朝

五味
まつめのを都まつめのまつめの國の事

正治三年百萬

里大店主大倉

五味

千五百番手令

大納言酒具

五味

まつめのをいわむれわすととをまつめのを

同

赤御内大臣

同イ

もあられ代りうすととをすととをもまつめのを

同

後鳥羽院官典

はの國のまよひをやめのとよつゝ宵よ
建保三年七月廿日

順徳院作製

中へあらねもしにほんのとくにあらまち此方
六帖類

五五七百四十九日ありてやきう因りよりすむわ

月

やしまくわが三歳不思をすとくにあら大
文永二年七月廿日

月

ひづるを津をいとすもまのうんりゆかとしと
とに

自言社三十首

長王佐家流

名ももアラモヒリのよそく船をやさむと
建長八年七月廿日

蘇原伊嗣郎

トモモモハシのよそく船をやさむと
非故よ幸の時

笠金村

アラモヒリのよそく船をやさむと

人をもねむと

佐野

長寺

讀人不知

五
あらうらもらうてあそばるよあらうのれ
うらえれきまうじ

内

同

万十三章集

水 槟之園

さぬけと 天

降塵集

あそき

かみよし

たしゆ

まく下

前引

十萬才

かみよし

まく下

同

あまきう ひまかきと
えもなわ わらひのよ

人内 あまきう ひまかきと
えもなわ わらひのよ

同

あまきう ひまかきと
えもなわ わらひのよ

中納言家持 あまきう ひまかきと
えもなわ わらひのよ

同

あまきう ひまかきと
えもなわ わらひのよ

讀人内 あまきう ひまかきと
えもなわ わらひのよ

同

あまきう ひまかきと
えもなわ わらひのよ

人内

やまうひく まくらひと みくらと うやく
をむらり あまのくよ やくら やく

ト部 互直

雲葉

うこひすやまもとまくらひと みくらと うやく
け玉い定嗣 てよ真觀改要 人内

竹里 时治因如 我樹の口と

雜序の牛

他阿上人

一頃

六帖題

權僧正云朝

祐國と申芦厚と云ふと
中務

家五十首合

同

波にて因もさぬまうまでその本あつとらじよ
け寺判者先後朝臣云浦安國伊弉諾
尊名付給リすにモ他よとトトト付トき
波平風浪聲也ア若シく賞シゆきトとトき
五行の序シキより
後京移校政
もトもトもトもトこの里トとトくにのをもト成
色

禁中

寬志元年女歸入內侍屏居

西園寺公宗
西園寺公宗
西園寺公宗

西屋の事大論
そのもじりたるのうへ
佐二位家為人

卷之二

うふにあひの被ひてはせしら筆の筆
同 正三位知家

16

二夜有首

後宮移松波
水のゆきのゆ乃

四

名士之子一也予之子也
寶治三年夏月水色雲

正二位
御家

卷之三

題不

洞院橋改家首有 俊二位家隆

そよれ歎きふとあひけのちうじとをもう

作集月

法性寺入道用自

九月にうさぎのまくわがす月の神のうか

同

同

せむれどくよめり青月にてまくわうのまく

三三とうのまにまつてものまく

後藤橋改

九月あると來とくわ木のとくわしとくわの初

十題百首居所

中納言寛家

高

まくわうとくわのゆくはくもくくはく

後京橋改家十首奇会禁夜書

同

也のうらはくわ櫻宮うりて春水をうらまくわ

建久元年一宇百首冬奇

同

百夷やう日りまへとくわうやううらの御をう

仙洞三十首たまつる實

信

うみやうせうまくよううとくわとくわうとくわ

百首

前禁中

慈鎮和尚

あさ野ともひうそあ写をうかうかうかのうか

同

蟲をうかうかうかうかうかうかうかうか

六帖題

信東御后

かみ二十九

十題百首四
後高麗校改

百首や玉のうてみにてう日のりもとえうれの文人

同二年百首

後二位家隆

よし川よによしくわのねの信義有けせばとうはさひ

正作二年化同三公庭松

正三位季経

えも鳥もすく夜の唐させよひりととく尼と月

六帖題秋の月

先後詮

あてぞむちの吃哩字ハシニカニタとすをかねまの月をす

月メキシマトミテ寺之御アサヒのまきをとそれ

河竹カクのふみのまつみの玉タマの度タマをとす

月

文永イイク五年正社セイジ會 皇太后カウタウミ本ヒラ修成スル

モトキヤムキヒツキモトキヤムキヒツキハモリモリ金カネをう

百首二つ禁中

參議雅經カニガニ

お竹カクのふみのまつみの玉タマの度タマをとす

月

お竹カクの古代コダケのまつみの度タマをとす

のまつみ

同

月

永久五年百首似家仲實羽門

桃の花を免まことにひくもとね里トドすとす

後賴詮

たわらぬ衣カツバの神カミすけせどもとおゆきをまつも

同

源昌昌

富刊ノイ古ニヨシ

のうりつす月はまくと日もあけぬもしら
承久元年内裏御令

前中納言寛家

元治元年秋月

仙草すまでいさのこのかうとすよがひ

弘安元年九月詩哥合仙家勝趣

象山院

まわをもとにもきてつとよからどじとこに若ち

内

入道前大政大臣

前中納言高氏

元治元年秋月

うるまくはの葉れどとくとのえくと秋そひき

内

後三位頭皮

吟風をもすはは代わきちじづれりの氣のと

仙洞詩寺合仙家林真

后三位行あひ

直もとせのめやもあひもとめりもんじら

仙洞^{ムニヒ不審}下よもぎて仙屋^{アリ}七ヶ

経行は仰

あらよのてようちをとおとくに金多

都

題す

かみや 篠金村

前元治元年秋月

方よりはせよとある

三芳而外多難却

同

讀人不乞

遠往目

万六
川山の水のと大河とあらわしゆ

同

同

定標等語

万六
三輪原やいの村をさよみをもやとあらわしゆ
弘長三年内裏百首賀詩

後二位行家

山あらのこのあやをやまめりととせ貢めよひき

音書寄合

惠鎮和尚

新稿

千五百首二合

後醍醐院御製

玉手のそらせとくらむいきかわすれよ杜風

家集

席中幼言庭房

郭子常集のじよふととぞのあニと思ひて
建保三年家百首序

光明寺も又人道持故

題不知

韓人不知

うちじれとせよもと宮の室の文やれどもちを

忽因海上有仙山 大寧大貢高達

たすといつてもとまづうみの原よりあらわしゆ

六帖題

信實教長

あとをすもしれの右教のうかわづくはせしゆ

題不知

或教て字合

しり一そをだる事とてけしゆこととす

万三

万三

建長七年頃朝卿家千首詩

藤原光朝卿

とひやうりをとけぬまわせたまのむかひとうせんし
御院橋取家吉首詩三月

支那屋も又通極故

日暮のをとてそくもまたまうをこに背そく
題不知

ひきえれおとこまであまくさきりゑとつま

同

名付

枕部成家

かねすとものおとこまよたまをすとてまくらへ

同

讀人不知

ゆめのよじきやら原のよしむかとをくさき

讀因王

秋野のもれりよしやどきりこゑはこのり晴て

秋三事

藤原頼成

年

晴て

秋のくわいがよきと背くらむれおとよもくと

同

名付

讀人不知

有るよしむかのれのれきこむくちぢくす玉筋

長年

あらじくとこじめの原あら

そちとあまと。まく

題不知

福丸

せのやとほせまのとしそうるやかくわらを

同

太宰師大仲

伴

也

万六休

保持品 金零數

牛平城 東師

所全

十同

あく事のうとく

牛津

竹人不

柳

か山

月

うま車とて船これきわきとえきは

新屋

月

年と年によくそすりのりをれよりせかさき

月

あきあらうすれむよだかひづとめくをまつめ

月

ちらうち古に教とおきいのとまくとくも

月

あくれ都ゆく作の

月

り男へるゆれ故のまことらこのくすりにまとのう

月

仲原師走

牛車

外と月のじゆすく

三乗右大臣

通美ひ萬来の日とよみ

月

題

通金才大臣

もひううう出でよあし

月

文治六年正月書

竹

竹

後賴翁

わく竹のむよとめてもめれうすばばのす

月

け舟へ伊勢にゆく比

月

大内をもとと入居すともれ

月

さくすうもの又とこもひじもたらひ

月

新羅杜工全述讀 読人不見

兵士にそむかぬよとし人をさへうりともあはれむとち

は三の判者清捕多良云走すよきとつらとた
あふとくまゆとあうせよ手よと船を
のまやこそ三の公をくにやうにひよしとえ
わざととえ

散錦

あれども

讀人不知

五二
のそにうねのこれをもよさせいとこうそくとくに
千五百事古元多合後鳥羽院内製
さういわやひとわまのうけほりせものよと

元久三年詩集卷之三

前中納言定家

一虎

新千春下

やまよりすばらの風たまへきてもいまとまの風
六百萬石の公

床並せ仰

長年

少しきまこととて馬をりら上りこまて
すあうとたまうとて あまことに

恩也

万清浦余千馬妻喚 降今霞立 武南博乃主

題不見

讀人不見

万三

わふすまや我ひよ小所くがくひすりす里をとせ

長寺

同

日本とおどりからひよ重事のうえひとよけくまを
つみれさえすうさきは

題一ノ年

坂上郎女

かづえもどりあせとよしよしめとよそもく

内

うちもくらのそよよりぬるよまのそくにせうとね

丸

大をくびり行里よまと軍てトモのよもじ草を

同

天武天皇御製

五

我とによもすり大原のよす里よもまくひ

家年

前中納言唐房

五

冬と是は古とよし大原やまのそよぎやゆさ
建長七年題朝家年有寄れて

權サ僧都玄覺

ミカとしままわくよまのせしわくにままでたきを

延保年仙因有

前中納言吉宗

ひのとく我古のこい草よまのそよぎとねりま

千五百番二ノ年

家長船

古傳書(古傳書)別云古傳書の事
大原を喰ひて此の名を行ふ也

永久四年百

日暮

あらわさむひとけよきてよしらととねりま

同

仲實船

行あらわさむひとけよきてよしらととねりま

家

仁和寺は親王家六十首里時鳥

前守幼言定家

時鳥やときよひとよあさますすとしもひよ人
毎日一首才取て 民詠て為家
ちとやううすまよのじてやゆくもとめのひそひよ
千上首番号合 後々我内大臣

吉田(日京)正房(ひづかのさだるむら)はのむよきよみよの古
建仁元年九月五十首玉会

あ陽門院越前

吉田(日京)正房(ひづかのさだるむら)はのむよきよみよの古
秋津守中五郎(あきつのかずさぶろう)後高麗校改

天德三年八月鹿尾前裁合寄

元真

争りうきよけよたのうり三病のまどりにぞう
題不乞
もてて古くよきよせとぞうのえさうとぞう
文集百首三つ(新作)北山(北山生)破局

支後納付

古ことせゆの中心りいれてせよやさしく林風吹
建長七年頃朝家千首(同)紅葉

信實納付

肯よもれとて古くよせのせきといふ秋葉

貞惠三年百首

民詠て為家

御のうしれをめぐらしてやまくとす

人をと

故宮

八情若宮哥会に因りゆけんにあて亨

名主ノアラヤ

後京極松政

一すくももかの文をきもよしとく事あつ

題

中納言家朝

船古

特

たはれ野の文をよしとくもよしが

百角浦玉

カルタム而太和

赤津門院御製

同

大和

船津

かばせのよしとくもよしとくのりいあは

百角浦玉

別元イミル
弘はるみや

後江左家隆

二(舟古共ニ三松)ラクハ路

よしとくもよしとくのりいあはの文を

支那も入道長政家百角浦玉

信實翁

かひしとくもよしとくのりいあは

松原

松原

後法性も入道因自家百角浦

大和

信實翁

あくとくもよしとくのりいあは

松原

松原

一字百角

松原

前叶の字あは

え

さくをあはの字れおうとくの字あは

松原

信實翁

え

正治二年七月

松原

信實翁

後江左院御製

まきよけたら身もとまでをひきしめやうに

片手集

醍醐入道太政大臣

ありひよしのをあつてしのものとえわと

家集

鴨長明

ゆきよけらはあらかじるがくもいも

椎すや

按察使因陀

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

昇

れりあさはこまけてこけよあらわよまひよ

内

ひりふり

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

桔

弘安五年法華經寺家百首

同

乞食色レテ是れもあきらめ此の差の如
延長五年顯妙あ千首在

あすき賛

少僧教玄覺

たる乃はれの御よ神とてあらすのちに日と之
柿本景信百首

古事記

法下多海

みちめあまのむねとれどよひて、神がひく

日星丸題

つまき山

讀人不

やすりのつまきよもよとわせとをひなまく

弘長元年百首

大和

法下空國

あうしのゆ代毛とくいづれ言わそどのそと

古古題

權僧弘朝

そひに風ひうつと一もくとにひをう金城

題不乞 さみき旅

旅人不幻

やくやまひうてきいき

代

弟よもうくへん大意

長哥

同

心うらわ、せふき、よもやうり、ゆくほまう

たうち

し

やくひあい、からく又

内

う葉のき

中納言家持

九

あきらまよとひかくれうゆひあに
あきらかくがくと、あめをくもくめけ

内

う葉のき

人丸

ねりうてはくわい

わち君のうりゆせ

人丸

ねりうてはくわい

五二

くじめやとむにすきとすやあれば

題不^レ

同

^五 枝のままであらうとえらひのまよの井にゆく

極寺よまとて日とみて

寒蓮せ節

さくらしもくをかたらしの日とみ

題不^レ

讀人不知

いと静たくものよの池よどじらひのくまもしき

用居

文集百首

前中納言定家

我居をすりにそむわの月をきづりうしもま

きす

始知真^傳傳者不必在山林

同

凡^まくや^いまくよもうとひゆうせとぢゆ

家^か立^た用居

表多院入通ニ品のそ

里^{さと}静じと候若にうきてまことかくまひ

同

三事入通^た大^だ門

ここよけとまよけよもくへよはくと

同

前大^だ御言為家^か

源師支

山^{さん}とくとくのまわるとよまよみがから

同

覺^おはせ

谷^{たに}

是^は豈^か不^可

是^は豈^か不^可

是^は豈^か不^可

是^は豈^か不^可

心きと自のえもとまつてはのれよやう成ら

同 因居

前大納言隆房

若のあはれれ松林もすてにさりこよまゆら

同

もてわねの角えふとゆく人へわのうじと

同

ひそひをひ半のえづれき苦おひまわせを

月

元中納言家

のふねつす本草がくもとくの月もとく端

同

ひまめあくまと詮よくゆ人をひまめと

同

宋蓮比附

山里すひのものもひそとづく人をじらのあらとせ

古帖題椎月

支那新約

山里すあきゆくひととぞせよすけ二月とみよか

新六

文集百首因居不厭

不_良人_良老

前中納言家

里ちるはまちとづくともとぞほひらをいづく

三九

窟

後法は寺道用自家百首述懷

後宮舊稿故

うきせうひうりゆのたよもじこけねをくふ

十題百首居所

同

山中の空氣は、とても若々しさをもつて、
曉風拂雨斜陽見塞流用木流水
水木
の神

前半細言。定家
草子の床の上にまわるやうでうなと
百音説二
後九年の大長

生の御慶祝の事に於ては、
十五百番を合被(ヒテ)ヤ、
鳥居、屋上、太鼓台成ル、
ひきさく師ハの是處を氣ムラシめしのそと草紙で
建久七年百十番額ヨリ。

中納吉定家
うわいどもひそよれ月をのぞむよし
文掌外童子のよし
ゆのうばや

卷三

前檜傳正宗書

新編定家
てかわらひと

文治二年十月の事
あゆみの定家
さりゆき吉野のあゆみにてわらひをもとせ
後成て家十角三の後三位頼政
さるの吉野の心の思をよみたのとくに善と善
家集し家ゆと
後三位家隆のイ

家集と家風を
吉野山の老翁と云ひてとぞいとす
百首詩二中
後九条内大臣

六帖題
えのひは下
本多忠重

花月百首

ミルカホヤ

前中納言定家

有りやうまのをとむのちのうへよたまることひ月と

家集志二中

ミルカホヤ

臣二佐家定也

奥のうちもとそりとやの子とよねくらひと月と

三百六十首二中

カナシタヨ

好忠

河上や、さじのをとけとゆみこけとせんがく

モロヘイ

キ国

枝人

原さく人

木すきくわせとこうりう

内

内

原さく人

木すきくわせとこうりう

内

内

原さく人

絆三穂窟よりよむ

轉通法師

是の處よしてくわ木すきくわせとこうりうとあひか

定固行仰

紅の葉えみのあとさせと年月とあくわせと

寶治二年百首

衣笠行本

我をさうのをとよはゆのとくもとくよま

宅

六帖題

民詩とも家

ヤリ

いせんよつよつよろひてよすもとくわせと

同題

充後翁

か今我妻をうつまづりともだれをまど

百首序

長安道後事老

山里へまつれのやあらきくわのえどく

洞院橋政家百首不遠也

氏部正家

東海やねづやまたひまとあらわく月もさす

中務守被て家六十首二会

拾得と不朝

まくおはにあをむわきそにいさと見て度す

同

ゆきよよしのう室の月

先隨

葉扇屏月萬向隨風燒

同大江年

従くとすよひりせきり所因のそよ

赤集

廬

百首序

順應院序製

篠つれ野のつれれとあらわよ

日影

寶衣持百首序

襄鎮和尚

土砂よ空ありれひまともとま

もと

百首序

東並行所

東肩

雪よほく雪の唐よ神そよだにそよ

寶治三年百首稿

三位初家

おもひへども心地ぬれし神さまりゆきゆく
家集山家事多

源仲

山のうへりへやあけやまうすくすくとまつら
題あく

要
たらぢめんとわきてよことえられたじりゆよそ
讀人不

あ意三年正月社正合院宿

智經行仰

かくことあはれのじよとおせまきもん
千首可

民勤家

り富て富ういのれたらひくふく

寛治三年百首

信實

かひくとおへりのれそもくをすす百首
建長八年百首

後位良教

山集田家月

四月

後法性も入道院自入
あるるれ因りよすこらじやどくはもよよと
よあつ

圓院持取も百首

光傳等も入道院自

寶治二年百首

夜鹿

常磐井入道太政大臣

小席さく坐せやのれもよ御すのひの身

まき

家集文のよしよしよこりうるを

山田侍師

も時どすらかうりいから來まわせ
山階入通たゞ家有山家風

移石山

民勤てももん

おひきとよわせれねじとく算も一き
霞鳥羽後遠所にて數共中井尋

山家文有

玉の月

從二位家隆

もみれのうりの有たもめすりて不^レまつ
家集和哥中

玉の月

同

たてくてト葉のむちもくひのむまは
十題百首

高曾侍師

そちと枝のうりよまとあけてあうてまよとむか

正治三年百首

山山

小侍候

もよそとよじとくすすく家事とよそとしと
建久五年

古事院大進

吉翁と是のむしのくけふみれのくの良とま

野

藤

藤

讀人不知

知

下

万七

詰

御

事

通

二品親と家五十首

鷹

大藏卿有家

火

花月百首

慈鎮和尚

ひくよのむにまくよまくまくゆくゆく

拂菻泊瀨山春

後高麗校改

えきしむよしにせやめらのあきらまの木

山

さうり三笠山

枝ノ木

あきらむとおれどもあきわづり写とさ

建治三年名所百首

小山

山

山

老清内侍

ゑみんくはやうじとそひうらわうが
文治五年やまに入り屏風

正三位季経

林家をく摘要のよしもあすまのむらをま
後九葉内大臣家サ角枕官

前中納言定家

ゆはやむしれのむらまくやめどりて日もひと
あ祐二年百首

民詠てる家

よ人ふむくたり毛絶てむじのあがの君
建長元年三首山家玄草

同

下をひしとほりとす家よまくしもと下のひ

慈能和尚まつせ良傷十首中

古類注 桃源集、三言半句有りの事のうそ

草牛納言定家

小山の痕のりつるをくらむとたのまん

桜門主

後高麗校改

の

あくとくすやく松をいわせのうりあわせと

後桂府寺入通用自家百首雪

翁

高曉廉鏡

生白壁

内

内院右近家百首同信

富士山
五十九

は北条内大臣

ひもよあひやうれりせられたまとみゆらす

帝集

同

日づかむわのじへるをとめによし

貞永三年百首同邊家

民部左衛家

かくひとよせのきくあこくうぢとせの音

長亨

讀人不知

うしたくひきみますとまたですよ

屋

題不知

人乞

あたごくわゆくのとく草とせの事とことき

万十位 同 相指哉 河内本撰 重讀人不知 諸所用來

老弟五十首合

万十位

は東叡大政

少別

あはまんをもあふてうちもあつまつ

千五百首合

大藏主有家

すとやう壁をひづるあきてあれはあやにそき

家集遇不逢意

後賴翁

九

百萬金を乞ひ

西原

在後院へ通二事處

信實船下リホ

西原

争ひて内みせあらすされよ本の事と致す

六帖題セイシツ

新實船下リホ

西原

もとを復り直すましよにうそりあらす

タ封印シヨウイン

中興資仲シキ

西原

日よてせんのとれわすとあがたよ文書

久安百萬

大船附チヅク

西原

その夜はのとこもしてひらむをいさ

百萬押すやキミハシヤ

毛々院通京モモイニンツウキョウ

西原

うまえにまことせん竹だらだじりよ草

内ナカニ

毛體モトキ

西原

取もむとせん竹まつらをよみと

取もむとせん竹まつらをよみと

花月百萬はす

後富嘉納船政

こゝひきもとせん竹のやよ爰までうけの竹よ被

麻首マヒ

西原

そよも野中のねと本とえとをよとと

家界ねう中

後三位家界ヒサミツカイ

西原

うれしれあいぢりすせん竹のとくづく

千五百萬す公

あつ陽ほ封前

西原

片是のまれのとくよ松葉もくれすまづか

支毫院通二事款と家又十萬

西原

野經月ナガマツヅク

後三位家界ヒサミツカイ

西原

居りまほや先づよげ軍主ととまの

家界意す中

西原

西原

かくのそくくともひよひさへも度の愁は
建保二年内大臣家百首水滸寒声

前中也定家

多情の才、余りあうきて度の度重んに

家集すら人の贈答 西行上人

口角の聲を仰ぎてうきよてあましまくと以
神力品如來一切秘要之藏

同

多情の才、余りあうきてえいもあらうるや第
久美百首

ちよあひや

前參議報墮

ちよあひや

もやうあまれてやじよとてやくとまだくよみの

百首うほ懐

かや

麻葉は所

かや

うきよとつやのうすし冠のてくよすきと
家集深山霞

うね
あり上人

多情の才、余りあうきてえいもあらうるや第

ちよあひや

千五百首示公

ちよあひや

後鳥羽院宣

ちよあひや

きのこあまのとせやのうひとよととめあ

ちよあひや

十題百首呈

ちよあひや

後京極村政

ちよあひや

タキヨハ源氏の爲めに起てあまのをとてくよ

みでのかひ

百首工

みでのかひ

重文

美の月の月をきほく、けくしてのうやにあらむ

たうよき

六帖題

たうよき

民部家

みんべい

屋うちとゆにその下の字をの字までわうくらにう

いだ

もじも

支候ね

ト

四
五

がをもれにあらわせに争てもよがる

題之乞
諸人不乞

まことにかのやうにあつたとて
さういふやうなふせの三事よもやうりのこころすむ所よそ
をち
三百二十角中
あづけのうわ
みき
じゆ

新協賛
寶治二年百菊
秋月の向
衣笠内大臣
り筆

國子神主

法輪百萬山家本

源仲正

うひのまにまわるのを
えりやう

屋
形

中三精粉集家

嘉慶二年夏月杜工部草堂有時雨

卷之三

卷之三

あゆニテモ百首タラカシ、民歌ニテモ亦可也。

御文庫

久安直角
かくじゆくに
前赤旗親隆
まへあかぢきしんりゅう

卷之三

隣

六帖題

衣笠内大臣

内

支後船

づよきのまむらさきとすにくみ
内ものらうこり 中勢のみこ

いとすよのときの宿はよよかすじあひるをき
内

檀僧山朝

あまひひよりとくさくらう人の事にそがれ
和玄洞鹿

而上人

さうかねのちやあうとよ扇おほきをわふそ
家集

松原大賀季

青のよよつこそやじらうひよりれおそれひよ
永久年百鳥隣 仲實船長
父すすりわらうたまきせれれとつと水
同

藤原惠房

たらちゆのよしにまくとすけよと様ゆひよすと
文集百鳥寒 鳴飛急竟秋尽隣鶴 竹
鳴遼知夜永 前半納言定家

まむりの里は隣のあひ鳥あひづけもとづけさき

山家

延長二年拂屏内 貫之

ふみの里をあひづけもとづけさき

宇治殿より山家詠情

宿後抄

大納言經信

後地羅四

椎神とく富と原とよらじまとすまきまうの教人

古五百番守^先守公

寺門内内門

老の脛もとまつる今わとそどてつゝと詔

椎二守

古未^未言經草

石の鳴れのくらと候そて老とくをしもゆき

佛事山家ね

後鳥羽院御製

ひきうてらといひ文書の文のねにまきふみ事方

元治三年百肩山家 後二住家隆^也

入ぬや教の人をあくしゆくらりあらむ月新

百肩佛事

無鎮和尚

りくえんじくとくにほく花れりあすの金とれいと
洞院持政^{家元}百肩山家 常盤井入角大政大臣

たととすやそのよけくんね本の小称よくくよ

やののくわくとくづくとよめう

信賴経信

かきみ^歌

洞院持政家百肩山家

後九条内大臣

石すきこけよかさうきのくす事てくよせま

同

後三位祀宗^也

かきみ^歌

まきほくわのたわもととくじく座もとく

内

後三位賴氏^也

かきみ^歌

又トモセハ秋のともきつゝはしのちひれ等のときと

弘長元年百首

後九年内大臣

きみとモアシ人をすこしうき風とひそむ事連

佛年寺家

同

朝とうれこの山の松原もけきらうにうづくまか

百首序文

後高麗校改

けりとるの、えもつまをすやすすと生じるは

家五山家承あ 同

あもしもするりよせうのきくらうらわいよせ

南山百首五山家同

みづれさす立ちじよ宿のあまとだまことせん

山家十五首序文 同

すとほてなす一山承詔す一深のひの氣の下

同

山はやわらかにけの下わてうらはくよねそく

同

かきめぬくとゆうまのひよれうわよろきの

建長三年十首合

元判衆議判出赤枳院

正三位成實

人

我尼と山の山行あと草を深くわくわくと見

同

山中またといひせ竹の戸よ同を來もし時を

洞後村取百首山家 大納言經通

之

どうよけくわねと自らひと自らひと自らひ

自ら

同

前半納言定家

同

内

若うれしませの朝夕^{アラシタツ}すとせうらひをまづ
同

後二位頼氏

山里あせらや妻ひよもや小鹿のとぞゑ

同家百首歌乙 内

財きりあまく下さきつて一あともと若のとき

山家

名うかたせとくろ窟^{クマノマツリ}竹のじゆのまのと橋

同

家長ねむ

我のともとくわがよすとじてねのもとと萬

山家三十九

大納言教家

久安百首

ま通歌乙

手よねるの袖^{アシカ}と室のあくと高まつめあう
山里のれう事とふとと

而上人

直^{アキラ}すくわ高あられてまじてはすう草の

千丘百首歌乙

後修我を取大内

家其山家と

後二位家隆

元

果の戸をあけり^{アハ}の事^{アハ}よ正^{アハ}う様

寛永三年七月入内

屏風圖

圖

山邊氏家

西園寺入道太政大臣

萬葉子ノ氏内角と之をもととて直角より是のと
さと

正治二年百石山家 隆信朝臣

都とらもいこうし(き)もあ入室のよひ

文庫主五社百石 皇太后主奉飯成

外主もくじ御計ふそひとてりものつとおれなり

同院橋改家百石山家

も盛三つ三つの苦と立つて 三毛の御よひ

建久七年百石山家

同

守主久吉翁代翁子すれどはかまひに取てか

前中納言宗家

も盛三つ三つの苦と立つて 三毛の御よひ

建久七年百石山家

同

守主久吉翁代翁子すれどはかまひに取てか

同

色はるる翁子のむをあわせとりやうす苦め

内

たらうりし翁子すまづ不引今いきまの翁とぞ

同

文治三年田居百石

内

御のと景也か(と)ひ(と)すてもあらそとぞ

正治二年百石

内

近の高木守の里へうきよ御身をあらはば存

建久七年百石

内

物もすと人内さけうふ里のひきくけよひり

貞永三年朗旗百石

内

街市

正治二年

正治二年

正治二年

正治二年

出室中

民歌アラルをもあら

筆の房の言ひうる月はも育めば山の風也

新立 筆

六帖題山シヤン

同

りかうじこととまどひにそももんやうてほま

文治元年毎月一首中

内

ちもあらだくたとみそよきのめのまわ尼ふれ

建長三年毎月一首下

内

山黒のねの木はまゆいよまくはまく

内

小金どすぢや豪若けのあとまき延ひの厚

貞惠三毛百首山家タカハタカ

同

きのけ、そのよひく吹風スイフウまきをひいてゆがん

文永六年毎月一首中

同

ひよせたくもせと里アリよもよきとくにゆく

同

修井て枝ツブとあらすもあらむれのとよだしき

千首三つ

同

りよせわとせとおれ月有りかよ不そてよとよき

同

かくもよろひともきげうちよとよきと金糸キンシて

家集と家苦

法眼慶融

たちのひまをかかへる金どしきのうそと苦のこ
あええ年よりアマ根すもは徳千首山あ

鶴

冬旅ゐわ

君にゆき合

前中納言ゐる意

いそとあうと思ひてまよつてとまのね内
もめら東北は仰のくにゆきう三の内

西行上人

百首二十九

麻蓮法師

山里もその野の花盛りまのむらよみを

和頃二十九首三の合山家

後鳥羽院典浦

ひえきてをぬしに宿の里をすましむすむ處の内

内

若真は仰

家集

悔賴教下

家集

私ちくみれぬ算ふとも心よそとくらをいし
はこの手もみよてこれくわがよれどこののれ
つて寺ふくよとおのくよいあたまをいた
てとまとばりよのくらすまうてくらを
とみときてうみやうと

同

惠鎮和尚

若けやひのまわい神すらでる神の氣乃多
此三つ文集百首よ心是為富高貴身用
仍富貴在^{富貴人}中何以居高任^送
^{足即席}書

田家

文治六年立社百首田家

東太古吉本富成^{足即席}
さうをやもし極ひひじきにもりとがけていつて
弘長元年百首 後九条内大臣^{足即席}
我乃稻葉のもじひしましてたひのあり大年
承久元年百首我之家

前半納言之家

さうそねり由のゆせつまども 照べくかうと善
貞永三秋百首 民起てる家^{足即席}の宿
かあく門の可い事起てよみれづ竹の一
寶治二年百首因水雨

後半納言之家

新和歌
の翁子の間^{新和歌}は唐のとく方むらうのゆすりあつ
貞永^{新和歌}三年萬葉入内屏風内田家秋收真^{新和歌}
光時景寺入内精改^{新和歌}
弘長元年百首 常報算入通政院
たるふとくの東のこどれをよあくのをす

同

信實社

如小田
かのよこをも行ひあそび
山田
隆徳堂家三の金山田

隆經於長家之公山因

讀人不倦

萬葉歌
麻葉也

百首

麻姑山

嘉祐元年正月四日

卷之三

文應元年七月初九日
吳江人王之春

日暮の宿

卷之三

四

三

大正九年十一月廿五日
新井田家

國のうえ松林をもとめ

正治二年七月

民謡の範文

塘川院古时有

卷之三

中約言因信

震
うひまほめのむりへかそめのひまをめくま
四三

卷之三

六帖題

正三店
家

金田三出
新ちニ山國

山川のそとその山の所ありこそのはういもを送
建治三年内大臣吉良田家時々

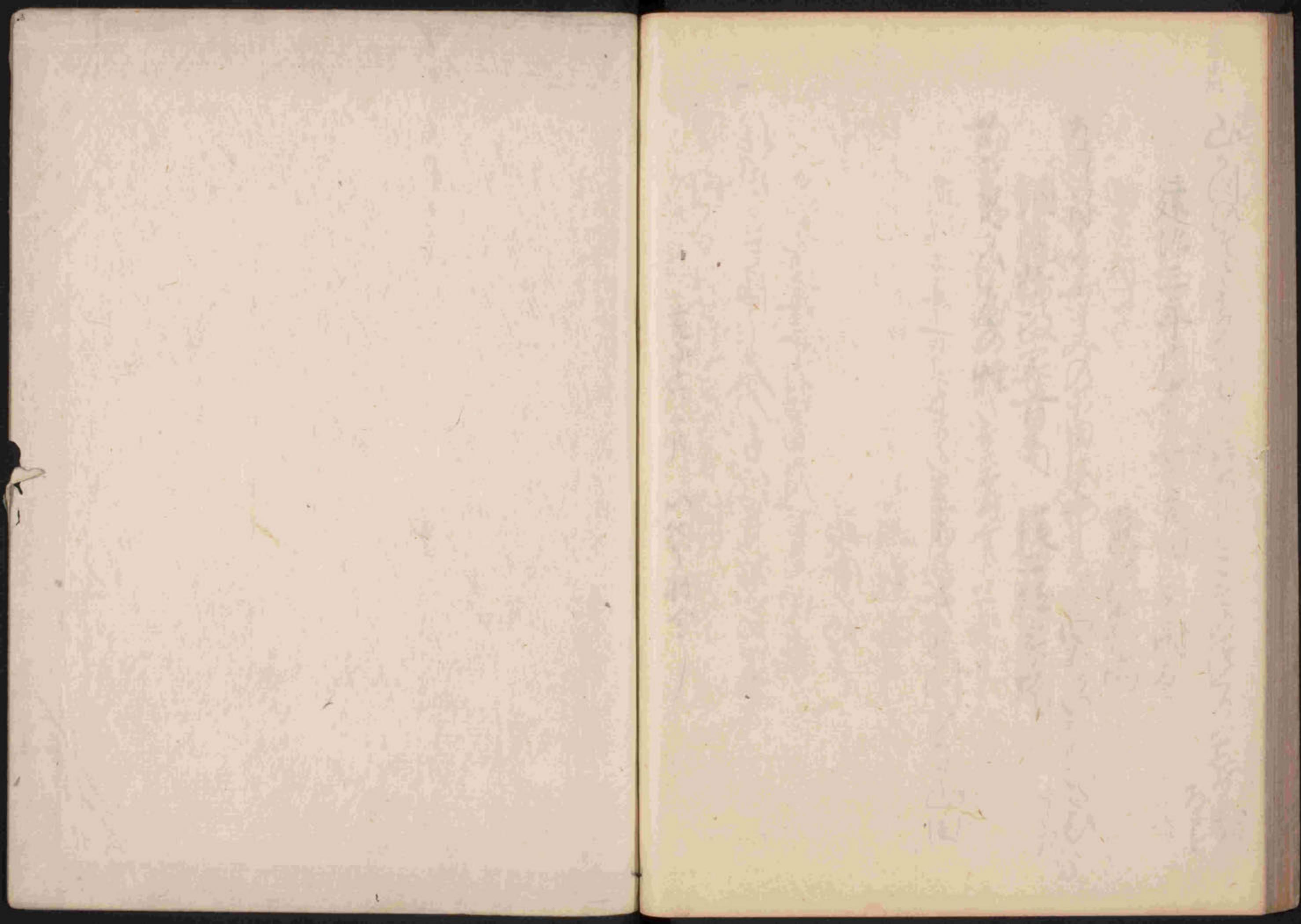
色はむか尚

手取る」みの山にまつてあつひのひし
洞院橋改家百爵 佐家隆之 さか
あく氣うひを始てそぞて

まき草あこまの山の山田

△言七十四
長十九

寛永十七月 ひづり假今



110X
495
21